令和2年度　No.4　〔2020年5月28日発行〕　園長：今野隆雄

［あるアンケート］

以前、こんなアンケート結果を目にしたことがあります。それは幼稚園児から高校生までの子どもを持つお母さん方を対象に「あなたは人間形成に一番影響のあった人を一人あげてください」と尋ねたものですが、実に80%の人が「母親」あるいは「父親」と答えているのです。回答者が女性であったためか「母親」をあげた人がとりわけ多く、全体の五割近くにものぼっていました。

このデーター つとってみても、一人の人間が成長していく過程において、幼稚園（学校）の先生でもなく、友人でもない、「母親」の果たす役割がいかに大きいか、その責務がいかに重いかを改めて思い知らされます。同時に、友人たちと深く心を通わせ合うこともないかわり、誤った行いも見て見ぬふりをするという、異様なほどクールな子ども同士の関係や、はびこる陰湿ないじめなど、現在の教育界の抱える病的な問題の根はどこにあるのかと思いを馳せずにはいられません。

それらのすべてを“親の育て方が悪いから”　などと短絡的なことを言うつもりはありませんが、だからといって、「世の中が悪い」「時代が悪い」で片づけたのでは、何一つ変わってゆかないのもまた事実です。むしろ困難な状況が日常化している今だからこそ、家庭教育の原点を見直す時ではないでしょうか？教育の目的はあくまでも正しい人間に育てることですから、私たちが親として社会人として為すべきことは、よほど他人とかけ離れた価値観の持ち主でもない限り、大方の人々が納得できるものであるはずです。

核家族化がますます進み、教育者としての先輩であるお年寄りからのアドバイスがあまり受けられないこと、一組の夫婦の持つ子どもの人数が平均二人を切ると言われるほど少なくなっているため、子育て経験そのものが足りないことなども、その原因なのかもしれません。

～季節の暦～　　二十四節気のひとつ「小　満」（しょうまん）

5月20日～6月4日頃

あらゆるものが、成長し、天地に満ち始めるという意味。
麦の穂が成長し、山野の植物は実を結び、田に苗を植える準備を始める時期です。

[躾の基本]

1.「しっていること」と「できること」

身のかたわらに美しいと付けて「躾（しつけ）」と読みます。誰が使い始めたのか、本当によく考えて作られた漢字だと思います。
こと善悪、何をすべきで何をすべきでないかを、まったく知らない白紙の状態で、子どもは生まれてきます。これを教えるのは親の仕事です。しかし、単に頭の中の知識としておぼえさせただけでは「しつけをした」とは言えません。教えると同時に、その実践を習慣として身に着けさせた時、私たちは初めてこれを「しつけ」と呼ぶのです。すなわち、理解に行動が伴っていなければなりません。「知っていること」と「できること」とは別なのです。・・・

大人はどうでしょう？して良いことと悪いことの区別もつかないほど非常識な人は、ごくわずかだと思います。けれどもそれが行動面にも生かされているかどうかは疑問です。たとえば電車の中でお年寄りや身体の不自由な人に席を譲るべきなのは、誰でも知っているのです。それなのに、ためらいもなく立ち上がって「どうぞ」と言える人が、いったい何人いるでしょうか？まさに「知っていても　できない」のです。それほど私たち人間は、弱い心をも持っています。大人でもこうなのですから、子どもに一度や二度教えたくらいで、しつけの効果が現れるはずもありません。何度も何度も繰り返し、その柔らかい真っ白な心に教えを刻みこんでいかなくてはならないのです。しかも昨日も今日も明日も例外なく、同じことは同じように叱り、諭さねばなりません。実に忍耐力のいるところです。

親だって、いつも同じコンディションで子どもに対するわけではありません。調子のいい時もあれば、もう何をするのもいやになってしまう時もあります。それでも「今日はすっかり疲れて、叱る元気もないわ。まぁいいか１日ぐらい」では済まないのです。いけないことは「イケマセン」と、なすべきことは「こうしなさい」と根気よく言い続けるだけの忍耐力がなければ“しつけ”はうまくいきません。と同時に、厳しさも必要です。今日は子どもの機嫌が悪いから、あんまり泣いて可哀相だから、という理由でしつけの“タガ”を緩めると、せっかく一滴一滴汲み溜めたものも、その隙間からこぼれていってしまいます。「でも、幼い子どもにそこまでやるのは可哀相・・・」と、おっしゃるかも知れません。

しかし、そんなことはありません。確かに他にラクなことも楽しいことも知ってしまっている大人に「こうしなければいけません」と厳しく臨めば、苦痛を与えることになるでしょうけれど、はじめからきちんとしつけられている子どもなら「こういうものだ」としか知らないのですから、本人は自分を可哀相などとかんじていません。むしろ、ある時は甘やかし、ある時は厳しくすることのほうが、よほど可哀相です。その意味で、幼児期にさんざん甘やかされたあげく、小学校・中学校と進ほどに「勉強・勉強」と厳しく締めつけられる今の多くの子ども達が、様々な手段で反抗を試みるのも当たり前ではないかと思います

2. 子は親の後ろ姿を見て育つ。

子どもがしつけを「身につけて」いく時、もっとも重要な役割を果たすのは親の言葉よりも、親の姿勢や行いそのものです。子どもが小さいうちから、ああしなさい、こうしなさい、ということを親は絶えず教えていかなければいけません。教えられる側からいうと、これらの言葉は耳から聞いているわけです。口に出す事柄は、いわば理想です。体が表すのは現実です。目で見たもののほうが、子どもにとってはるかに影響力を持つのは当然のことでしょう。

どんなに口をすっぱくして、「約束は必ず守りなさい」と言い聞かせたところで、お父さん自らが「日曜日に遊園地へ連れて行く」という子どもとの約束をないがしろにすれば、やはりこの教えは身につかないと思います。真に思いやり深いやさしいお母さんの姿に常に接している子どもは、自然にやさしい心の持ち主になるに間違いありません。

まさしく「子は親の後ろ姿を見て育つ」です。
後ろ姿ーーーーーつまり、建て前や見栄でお化粧された正面の顔ではなく、現実の生きざまを、私たちは子どもに見られているのです。とりわけ、子どもとの接触が多いお母さんは、お父さんよりもずっと長い時間、背中を見つめられていることになります。つきつめていえば、結局のところ教育とは親の側の問題、と言えそうです。

「子ども達をどう育てるか」は、「親がどう生きるか」の別の表現に他ならないかもしれません。それだけに決して片手間にやってできるというものではありませんし、またそうであってはならないのです。子育ては常に真剣勝負、と心得たいものです。